令和６年度投稿

俳句

（十月）

鹿児島は　歴史がいっぱい　つまってる

（南洲公園　串町　隼）

せんがんの　巌となりて　密柑なる

（仙巌園

オサール生はるおき）

桜島　煙り流すや　女郎花

（維新館　原浩朗）

秋高し　坂上の雲　桜島

（南洲公園　兎鍋居士）

てっぺんに　冬靄かぶる　桜島

（城山　永田千春）

桜島　中心に据え　松手入

（仙巌園　筒井美智恵）

桜島　歴史を包む　雄大さ

（城山　やまさち）

西郷どんの　たぎる思いは　この地から

（城山　やまさち）

川柳

（十月）

成り明くる　堕ちては聞くぞ　斉彬

（仙巌園
オサール生はるおき）

鹿児島の地　振り返れば父　旅の終わり

（仙巌園　もっさん）

霧の中　雨に濡れつつ　働きぬ

（仙巌園　王新媛）

短歌

（十月）

目頭を　湿らすあの日の　はやり歌
会いたいよおと　叫ぶ城山

（城山　開明子）

瓦屋根　鳴りゆく響き　令和にて
煎餅かじる　子は別荘にて

（仙巌園
オサール生はるおき）